

Perplexityの「Computer」戦略に関する深掘り分析 と将来予測

エグゼクティブサマリー

Perplexityの直近の一連の発表は、「検索（回答）プロダクト」から「マルチモデル・オーケストレーションと安全な実行環境を備えた“作業OS”（= AIがコンピューターになる）」への明確な転換として解釈できる。中核は、①20のフロンティアモデルを束ねる“ハーネス（基盤）”と、②エージェント的インターネットアクセス、③隔離された実行環境（ブラウザ/ファイル/コード実行）を統合し、回答の生成だけでなく、ツール・時間・タスクをまたいだワークフロー実行までを「単一の系」として提供する点にある。¹

2026年2～3月の「Perplexity Computer」「Personal Computer（Mac miniで24/7稼働）」「Computer for Enterprise」「開発者向けAPI群（Search/Agent/Embeddings/Sandbox）」「Premium Sources」「金融機能強化」は、同一アーキテクチャを“個人・企業・開発者・金融”へ水平展開するパッケージ戦略になっている。特にPersonal Computerは「ローカル（個人ファイル/ローカルアプリ）×クラウド（隔離環境とモデルハーネス）」を接続し、24/7の“デジタル従業員（代理人）”を現実の運用単位として成立させにいく動きである。²

同時に、Samsung Galaxy S26へのOSレベル統合（専用ウェイクワード、物理ボタン、純正アプリ読み書き）は、従来の「アプリ獲得」ではなく「デバイス既定動線」へ入り込むディストリビューション戦略であり、競争が強い“検索/ブラウザ/アシスタント”領域での差別化（システム統合+オーケストレーション性能）を狙うものと位置づけられる。³

主要リスクは三層ある。第一に法務・規制/プラットフォーム摩擦（例：Amazon上でのエージェント購買をめぐる差止命令、コンテンツ著作権訴訟、クローリングをめぐる対立）で、エージェントが“他社の囲い込み動線”を迂回するほど対立が先鋭化しやすい。⁴

第二にセキュリティ（自律ブラウジング/ツール実行に固有のプロンプト注入、資格情報・機密データ漏えい）で、同社は監査・多層防御・サンドボックス・行動ログ・キルスイッチ等を前面に出しているが、運用設計とガードレールの成熟が成否を左右する。⁵

第三に技術/市場（マルチモデル・ルーティングの不安定性、信頼性評価、コスト/遅延管理、巨大プラットフォームによる統合型エージェント競争）である。学術的にも、マルチLLMのルーティング・協調は性能と再現性・コストのトレードオフが難しく、安定ルーティングや決定性を高める研究潮流が出ている。⁶

今後12/24/36+か月の見立てとして、ベースケースでは「エンタープライズ（コネクタ+ガバナンス）」「端末統合（OEM/キャリア）」「開発者基盤（Agent API/Sandbox）」の三角形が収益化の主軸化し、Perplexityは“マルチモデル時代の実行層（Agentic Control Plane）”に近いポジションを取り得る。一方、ベアケースでは訴訟・プラットフォーム遮断・規制強化が深刻化し、最も差別化しやすい“自律行動（買い物/操作）”が制限され、RAG/検索寄りへの回帰を余儀なくされる。⁷

注記（ユーザー指定の「2つの日本語記事」について）

本スレッドにはリンク自体が提示されていないため、「Personal Computer」を報じたGIGAZINE記事と、「Perplexity Computer」を報じたImpress Watch記事を、該当“2記事”として扱い、公式発表（Perplexityブログ/ドキュメント）で事実関係を相互検証した。もし想定記事が別であれば、URL共有で差分反映が可能である。⁸

最近の主要発表とプロダクトの全体像

Perplexityは2026年2月に「Perplexity Computer」を発表し、目標（ゴール）を与えるとタスク/サブタスクへ分解し、サブエージェントを生成して、調査・文書生成・データ処理・ツール連携を非同期に進める“汎用デジタルワーカー”として位置づけた。実行は隔離された計算環境で行われ、実ファイルシステム・実ブラウザ・実ツール統合へアクセス可能である点を強調している。 ⁹

2026年3月の「Everything is Computer」では、このComputer機能をPerplexity全体へ拡張する形で、Personal Computer（Mac miniで24/7稼働）、Computer for Enterprise、開発者API群、金融調査能力の強化を一括で提示した。Personal ComputerはローカルアプリとPerplexityのセキュアなサーバーへ接続し、承認が必要なセンシティブ操作、監査証跡、キルスイッチを備える“デジタル代理人”として説明されている。 ¹⁰

Enterprise向けには、コネクタにより既存業務SaaS/DBへ接続し、部門横断（財務・法務・マーケティング）でのユースケースを提示したうえで、SOC2 Type II、SAML SSO、監査ログ、管理者制御、サンドボックス内での安全なブラウザ/コード実行を“既存基盤の上に乗る”形で提供するとした。 ¹¹

同日発表されたPremium Sourcesでは、Computerの調査ワークフローにStatista/CB Insights/PitchBook等のペイウォール情報を組み込み「契約や統合なしで、プロが使うデータに基づく回答」を狙う。次の拡張として医療・法務・プレミアムニュース領域にも言及している。 ¹²

さらに「Perplexity Finance」の強化として、40以上のライブ金融ツール（SECファイリングやFactSet、S&P Global等）をComputerから直接呼び出し、トレーサブル（数値の出所追跡可能）であること、Plaid接続による実保有ポートフォリオ分析、Polymarketの予測市場データ取得まで含めた“金融の実行層”を示した。 ¹³

ディストリビューション面では、2026年2月末～3月にかけてSamsung Galaxy S26へ深い統合（「Hey Plex」、物理ボタン、Samsung Notes/カレンダー等の純正アプリ読み書き）を発表し、PerplexityアシスタントとBixbyの検索・推論バックエンドを担うとした。Google以外で初のOSレベルアクセス権という主張は、Perplexityが“端末上の行動実行（device-level action orchestration）”へ踏み込む意思を端的に示す。 ³

timeline

title Perplexityの主要動向（公開情報ベース）

2024-07 : Publishers Program (収益共有・API提供・Enterprise提供)

2025-07 : Max (上位モデル/早期アクセス/無制限Labs) ・Comet (AIネイティブブラウザ)

2025-08 : Comet Plus (出版社補償モデル、単体\$5)

2026-02 : Model Council (マルチモデル合議+統合)

2026-02 : Perplexity Computer (長期・非同期のデジタルワーカー)

2026-02 : Samsung Galaxy S26にOSレベル統合

2026-03 : Personal Computer (Mac miniで24/7、監査/承認/キルスイッチ)

2026-03 : Computer for Enterprise (コネクタ/Skills/Slack/サンドボックス)

2026-03 : Premium Sources & Finance強化、Search/Agent/Sandbox等API群

2026-03 : Amazon上の購買エージェントを巡り差止 (係争中)

14

技術アーキテクチャとオーケストレーション設計

Perplexity Computerの“計算モデル”は、LLMを「命令を実行するCPU」ではなく「目的を受け取って計画・ツール選択・実行・観測・反復を行うプロセッサ」として扱う設計思想に近い。Agent APIの説明では、単なるルータ（モデル切替）ではなく、検索（retrieval）・ツール実行・推論・マルチモデルフォールバック・監視スタックまでを“単一エンドポイント/単一APIキー”で置き換える「マネージド実行時（runtime）」と位置付けている。¹⁵

モデル統合は、Computerのブログで「コア推論エンジンとしてOpus 4.6、ディープリサーチにGemini、画像にNano Banana、動画にVevo 3.1、軽量タスクにGrok、長文/検索にChatGPT 5.2」といった“役割分担ルーティング”として具体化されている。ユーザーがサブタスク別にモデル指定できることにも触れ、トークン予算（コスト制約）下での“制御可能性”を差別化軸に据えている。¹⁶

ツールオーケストレーションは、組み込みツールとしてweb_search/fetch_urlを提供し、ドメイン/期間/言語フィルタ等を備える。さらに、開発者が任意の関数（社内DB/業務API）を接続することで、エージェントが「社内履歴→Web検索→URL精読→統合回答」のループを自律に回す例を提示している。¹⁷

決定的実行（deterministic execution）を担うのがSandboxである。SandboxはKubernetes pod上の隔離セッションとして提供され、状態（永続ファイルシステム）を持ち、Python/JavaScript/SQLを実行できる。ネットワーク遮断を基本にし、必要な外向き通信はサンドボックス外のエグレスプロキシが宛先ドメインを検査して資格情報を注入するため、サンドボックス内部のコードが生APIキーに触れない“ゼロトラスト既定”をうたう。Computer/Finance/Deep Researchが同環境上でコードを実行していると明言している点は、同社が「LLM+ツール」だけでなく「LLM+隔離実行」までを中核能力に引き上げている証拠である。¹⁸

Enterprise側の“業務統合”は、コネクタ（400+ツール）とSkills（組織の作法をプリセット化）で表現され、Slack上での共同作業、スケジュールドワークフローの非同期実行まで含まれる。実行基盤として「各クエリを安全なサンドボックスへ隔離」と明記しており、Computerの自律性を“権限境界”で管理する思想が見える。¹⁹

マルチモデルの“合議・統合”はModel Councilとして別モード化され、複数モデルを同時実行し、統合（シンセサイザー）モデルが矛盾を解消しつつ一致点/相違点を提示する。これは「モデルの専門化と不確実性が増すほど、意思決定の説明可能性（どこが一致/不一致か）が価値になる」という前提に立つ。²⁰

研究動向から見た技術的含意として、マルチLLMルーティングは（1）コスト/遅延の最適化、（2）精度向上、（3）安定性（再現性）を同時に満たしにくい。NeurIPS 2025のRouter-R1は“ルータ自体をLLM化し、複数ラウンドでルーティング/統合を学習する”枠組みを提示し、ルーティングが逐次意思決定として扱われ得ることを示す。²¹

一方で、複数モデル混合が常に有利とは限らず、単一強力モデルを複数回呼び出す方が良いケースがあるという指摘もあり、エージェント設計では「いつ混ぜるか/いつ固定するか」を評価で管理する必要がある。²²

また、決定性・安定ルーティングを志向するオーケストレータ（ORCH）のような研究は、商用“デジタル従業員”にとって再現性が重要であることを裏づける。²³

flowchart TB

```
U[ユーザー/チーム] -->|目標| O[オーケストレーション層\n(計画・分解・評価)]
O --> R[検索/取得\n(web_search, fetch_url, Premium Sources)]
O --> T[ツール/コネクタ\n(SaaS/DB/端末アプリ)]
O --> S[サンドボックス実行\n(隔離ブラウザ・隔離コード)]
O --> M[マルチモデル実行\n(用途別ルーティング/フォールバック)]
```

```
S --> A[成果物\n(文書/表計算/ダッシュボード/アプリ)]
M --> 0
R --> 0
T --> 0
O --> |監査ログ/承認| G[ガバナンス\n(承認・権限・ログ・キルスイッチ)]
G --> U
```

24

市場ポジショニングと収益化

個人向けの価格階層は、Pro（\$20/月）に対しMaxを上位に置き、無制限Labs、早期アクセス、新しいプレミアムデータソース、上位モデルアクセス、優先サポートを含める形で“パワーユーザーの支払い余地”を最大化している。²⁵

Maxは「新機能の最速入手手段」としてComputerやCometへの先行アクセスを含むとされ、プロダクト拡張のたびにARPUを押し上げる設計である。²⁶

出版社/コンテンツ側の収益設計としては、Publishers Programで広告収益共有、パートナーへのAPIアクセス提供、Enterprise提供などを提示し、Comet Plusでは「人間訪問・検索引用・エージェントアクション」の3類型トラフィックに基づく配分モデルと、単体\$5（Pro/Maxには内包）を掲げた。これは“AI時代のトラフィック価値”を再定義し、訴訟リスクとエコシステム反発を緩和する狙いがある一方、すべてのパブリッシャーが同条件で合意するとは限らず、法務リスクの完全解消にはならない。²⁷

企業向けは、Computer for Enterprise/Comet Enterpriseを中心に「ガバナンス（権限・監査ログ・MDM・安全な実行）」を前面に出し、各部門の成果物作成を“待ち行列（人手）”から解放するメッセージが強い。特に「1.6Mドルの労務費節約・3.25年分の作業を4週間で」といった定量は内部測定であり外部検証は難しいが、購買者（CIO/業務部門）に“投資対効果の物語”を与える材料としては強力である。²⁸

開発者向けはAPIプラットフォームとして、Search API（1Kリクエスト\$5）、Agent API（プロバイダ直価格・ツールはinvocation課金）、Sonar/Embeddings等を公開し、さらにAgent APIはOpenAI SDK互換（/v1/responsesエイリアス）も掲げて“既存開発者の移行コスト”を下げる。ここで注目すべきは、（1）モデルを跨ぐ統一インターフェース、（2）フォールバックチェーン、（3）ツール実行、（4）サンドボックス実行、（5）コスト内訳の可視化を、単一プロダクトとして束ねている点で、単なる検索APIではなく“Agentic Platform”としての課金面を構造化している。²⁹

パートナー/流通面では、端末統合のSamsungに加え、日本市場ではソフトバンクをEnterprise Pro Japanの認定リセラーとして展開した経緯が示されている。いずれも「単独のアプリ獲得」よりも「既存の販売網/既存のOS・デバイス動線」に乗ることでスケールを狙う手筋である。³⁰

加えて、報道ではMicrosoftとの大型契約（クラウド/モデル利用）が言及されており、同社がマルチクラウド・マルチモデルの供給網を強化している可能性が高い。

競合比較と差別化

競争軸は、①モデル性能そのものよりも「実行と安全な統合（orchestration+governance）」へ移っている。GoogleはVertex AI Agent Builderを“ビルド・スケール・ガバナンス”のフルスタックとして位置付け、MicrosoftはCopilot Studioで“生成的オーケストレーション”を含むエージェント構築と課金（Copilot Credits）を整備している。³¹

AWSもBedrock Agentsで「基盤モデル・データソース・アプリ・会話」をオーケストレートし、必要に応じてカスタム・オーケストレーション（Lambda）で制御できるとする。³²

一方、OpenAI/Anthropicは“モデル+ツール”の垂直統合を強め、OpenAIはResponses APIでweb search/file search/computer use等を統合し、Anthropicはcomputer use（スクリーンショット+マウス/キーボード制御）を含むツール群を提示する。³³

Perplexityの差別化は、（A）検索起点の“引用付き・グラウンデッド”文化、（B）20フロンティアモデルを前提としたマルチモデル実行、（C）隔離サンドボックスに基づく実行（コード/ブラウザ/ファイル）を、個人・企業・開発者・端末統合へ同時に展開する点にある。³⁴

下表は、主要プレイヤー/類似基盤を「モデル対応」「オーケストレーション」「価格モデル」「GTM（市場導入）」で比較したものである（公開情報ベース、機能名は簡略化）。³⁵

区分	製品/提供者	モデル対応	オーケストレーション/実行	価格の考え方（公開情報）	主なGTM
統合“デジタルワーカー”	Perplexity (Computer/Personal/Enterprise)	20モデルをハーネス化、用途別ルーティング/一部ユーザー指定	サブエージェント生成、非同期、隔離環境、承認/監査/キルスイッチ	個人Max (\$200/月)、APIはトークン+ツール課金等	コンシューマ→Enterprise→OEM統合
垂直統合API	OpenAI ³⁶ (Responses API)	基本は自社モデル中心	web/file/computer use等の組込ツール、マルチターン	トークン課金+ツール/コンテンツ課金	API/開発者コミュニティ中心
垂直統合API	Anthropic ³⁷ (Claude tool use)	基本は自社モデル中心	computer use、web search/fetch等 (server/client tools)	トークン課金（モデル別）	API+エンタープライズ
クラウド統合基盤	Google ³⁸ (Vertex AI Agent Builder)	Google/パートナーモデル含む	build/scale/govern、フレームワーク選択	GCP従量課金（サービス別）	既存GCP顧客へ拡張
業務自動化/エージェント	Microsoft ³⁹ (Copilot Studio)	Microsoftエコシステム中心（モデルは裏で選択肢）	generative orchestration、コネクタ、管理	Copilot Credits（例：25,000で\$200/月）	既存M365/Power Platform導入企業
クラウド“エージェント基盤”	Amazon Web Services ⁴⁰ (Bedrock Agents)	複数FMs	action group/knowledge base、カスタムオーケストレーション	Bedrock従量課金（モデル/機能）	既存AWS顧客へ拡張

区分	製品/提供者	モデル対応	オーケストレーション/実行	価格の考え方 (公開情報)	主なGTM
エンタープライズAIワークプレイス	Cohere ⁴¹ (North)	Cohere中心 (企業向け統合)	既存ツール/データへ接続、プライベート配備	プラン/見積 (詳細は販売主 導)	産業別エンタープライズ
OSS/フレームワーク	LangChain ⁴² (LangGraph)	任意 (抽象化が低い)	durable execution、HITL、状態管理	OSS (運用は自社インフラ)	開発者・SI・内製

Perplexityがこの比較で狙っているのは、「チャット/検索」から「実行 (action) とガバナンス」へ中心を移した際に、巨大プラットフォーム (Google/Microsoft/AWS) に対し“マルチモデル/マルチツールを横断する独立レイヤー”として残れるかどうかである。Enterpriseの“モデル切替の増加”を自社データで示し、単一モデルの標準化からマルチモデル利用へのシフトを追い風として語っている点は、この戦略整合的である。

⁴³

リスク評価

セキュリティ面で最大の論点は「自律ブラウジング/自律ツール実行が扱う攻撃面 (prompt injection等)」である。PerplexityはCometについて、Trail of Bitsの監査、4層防御アーキテクチャの公開、BrowseSafeのオープンソース化 (評価ベンチに14,719例) など、多層防御と透明性を強調している。 ⁴⁴

ただし、Personal ComputerやEnterpriseコネクタで“ローカルファイル/業務データ/端末アプリ”まで対象が拡大すると、攻撃者は「Webコンテンツ経由で業務システム操作を誘導する」ことを狙えるため、技術対策だけでなく、承認フロー設計・権限分離・行動ログ監査・危険ドメイン制御が現場運用として必須になる。

⁴⁵

プライバシー/データ保持は、利用形態で性格が異なる。API (Sonar API) についてはゼロデータ保持 (コンテンツは保持せず、請求メタデータのみ) を明言し、SOC2 Type II等の証憑をTrust Centerで提示する。一方、一般向けサービスのプライバシーポリシーでは、入力/出力 (Service Interaction Information) をサービス提供・パーソナライズ、そしてサービス改善 (AIモデルを含む) に用いる旨が述べられており、企業導入では「どの経路のデータが、どの保持/学習ポリシーに従うか」を契約・設定で厳密化する必要がある。 ⁴⁶

法務・プラットフォーム摩擦は、エージェント型プロダクトの成否を左右しうる。2026年3月、AmazonはPerplexityの買い物エージェント機能がアカウントへ不正アクセスした可能性が高いとして差止命令を得たと報じられており、エージェントが“ユーザーの代理”としてログイン後領域で動く場合、プラットフォーム側の許諾・技術的検知・規約の争点が顕在化する。 ⁴⁷

さらに著作権面では、主流メディアからの訴訟が継続しており、Perplexityが「volition (意思行為) 欠如」を論点に防御する可能性が報じられているが、裁判所がどう評価するかは不確実である。 ⁴⁸

クローリング/ボット行動の“社会的受容”もリスクである。Cloudflareは、robots.txtやWAFでブロックしてもPerplexityがアクセスできたとする調査を公開しており、Perplexity側は誤認を主張してきたと報じられる。いずれにせよ、インターネット基盤事業者との対立は、将来のエージェント実行 (Web fetch/ログイン/購買など) の自由度を直接制限し得る。 ⁴⁹

技術リスクとしては、マルチモデル・マルチエージェントの信頼性評価が難しい点が挙げられる。研究でも、オンライン・ルーティング、安定協調、決定性オーケストレーションなどが課題として扱われており、商用“デジタル従業員”では「再現性」「監査可能性」「エラーの封じ込め」がプロダクト要求として非常に強い。⁵⁰

未来予測と戦略提言

前提（明示的な仮定）：

本レポートの予測は、(1) Perplexityが“20モデルハーネス+隔離実行+コネクタ”の路線を継続し、(2) 端末統合（Samsung級）が少なくとも1社は追加される可能性がある一方、(3) プラットフォーム/コンテンツ訴訟が短期で完全解消しない、という公開情報に整合する仮定に基づく。⁵¹

予測シナリオ（12/24/36+か月、主観確率つき）

12か月（～2027年3月）

ベースケース（確率55%）：Enterprise/開発者向けで“サンドボックス実行+コネクタ+監査”が評価され、Computer for EnterpriseとAgent APIの利用が伸長。Personal Computerは供給（Mac mini運用/サポート）制約から段階拡大に留まり、先行顧客の運用知見（承認/ログ/ポリシー）が製品へフィードバックされる。⁵²

強気ケース（確率25%）：Samsung統合が成功し、端末上の“検索+行動”で日常利用が定着、他OEM/キャリアへ横展開（追加1～2社）し、ディストリビューション優位が形成される。⁵³

弱気ケース（確率20%）：Amazonのような大型プラットフォームがログイン後操作を強く規制し、エージェント“行動”の魅力が削がれる。加えて著作権/クローリング問題が再燃し、企業導入が保守化する。⁵⁴

24か月（～2028年3月）

ベースケース（確率50%）：Perplexityは「検索+引用+実行（sandbox）」を組み合わせた“業務エージェント基盤”として、垂直（金融/法務/医療）をPremium Sourcesで拡張。収益は(1) Enterprise席課金、(2) API従量、(3) Premium Sources/データバンドルに分岐する。⁵⁵

強気ケース（確率30%）：マルチモデル合議（Council）・ルーティング・評価が標準化され、Perplexityが“モデル切替の実務ノウハウ”でデファクトに近づく。企業のモデル利用断片化という同社主張が市場でも顕在化し、横断プラットフォーム需要が強まる。⁵⁶

弱気ケース（確率20%）：巨大クラウド（Google/Microsoft/AWS）がエージェント実行層を囲い込み、PerplexityはOEM以外で配布コストが高騰。差別化が“検索UI”へ押し戻され、ARPU拡張が鈍化する。⁵⁷

36か月超（2029年以降）

ベースケース（確率45%）：Perplexityは「Agentic Control Plane（マルチモデル・ルーティング/サンドボックス/コネクタ/監査）」として、特定産業で“デジタル従業員の標準実行環境”に近づく。ただし法務・規制に応じ、購買等の高摩擦領域は“公式連携（許諾）”を前提に再設計される。⁵⁸

強気ケース（確率30%）：端末統合が複数OS/複数OEMに拡大し、“アシスタント/ブラウザ/検索”の動線で常用される。Perplexityが「検索=アプリ」ではなく「OS機能」へ近づき、収益は端末/法人の包括契約へシフトする。⁵³

弱気ケース（確率25%）：著作権/クローリング等の制度で“オープンWebの取得”が制限され、Perplexityの強み（引用付き検索）が相対的に弱体化。モデル供給・実行層はクラウド寡占へ寄り、同社は特定ニッチ（金融・調査）に最適化される。⁵⁹

Perplexityへの戦略提言

第一に、エージェント“行動”の正当性（authorization）を製品設計で担保すべきである。Amazon事例は「ユーザーのための代理実行」が、プラットフォーム側からは“不正アクセス/詐称”へ解釈され得ることを示

するため、(a) 行動前の明示承認、(b) エージェント識別の誠実な提示、(c) 公式API/提携による実行経路の拡大、(d) 監査ログ提出可能性の標準化、が中期の最優先課題となる。⁶⁰

第二に、マルチモデル・ルーティングを“評価駆動 (eval-driven)”で運用する能力が競争優位になりうる。Agent APIはプリセットを「透明な設定 (推奨システムプロンプト、ツール、コストプロファイル) として公開し、基盤モデルの進化に合わせて更新する」と述べているが、この更新頻度が高まるほど、顧客は再現性と回帰テストを求める。決定性オーケストレータ研究が示す通り、企業用途では“安定性”が価格以上に重要化し得るため、(a) 重要ワークフローの決定性モード、(b) 変更影響の事前告知とロールバック、(c) 監査用トレースの標準化、を製品要件化すべきである。⁶¹

第三に、Premium Sourcesと金融ツール群は“高単価セグメント”を狙える一方、データ提供者との契約・監査・説明責任が強く求められる。医療/法務に拡張するなら、データの出所・更新頻度・引用・免責・誤り訂正の運用を、検索品質以上に整備する必要がある。⁶²

顧客・投資家への提言

顧客 (導入検討企業) にとって、Personal/Enterprise Computerは「RPAの延長」ではなく「確率的推論+決定的実行 (sandbox) を混在させた業務システム」である。したがって導入は、(1) “読み取り中心”ユースケース (調査・要約・ドラフト) から始め、(2) “低リスク行動” (社内限定の自動化、検証可能なデータ処理) へ拡張し、(3) 最後に“外部影響の大きい行動” (顧客接点・購買・契約) へ進める段階設計が望ましい。Comet Enterpriseのように「回答のみ/行動あり」を権限で分離できる設計は、この段階導入と整合する。

⁶³

投資家視点では、評価すべきKPIは“利用回数”だけでなく、(a) エージェント実行の成功率/再実行率、(b) 承認待ち比率とボトルネック、(c) 重要ワークフローの監査可能性、(d) プラットフォーム摩擦を回避できる公式提携数、(e) API収益 (特にサンドボックス/検索/エージェントの複合課金) である。法務リスク (著作権・不正アクセス) が短期のボラティリティ要因になり得るため、契約・和解・提携の進捗は強い先行指標になる。

⁶⁴

¹ ² ⁷ ¹⁰ ¹³ ¹⁴ ²⁸ ³⁴ ³⁵ ³⁸ ³⁹ ⁴¹ ⁴⁵ ⁵¹ ⁵² ⁵⁸ ⁶³ Everything is Computer

<https://www.perplexity.ai/ja/hub/blog/everything-is-computer>

³ ³⁰ ⁴² ⁵³ Perplexity APIは、世界最大のAndroidデバイスメーカーに強力なAIを提供します

<https://www.perplexity.ai/ja/hub/blog/perplexity-apis-deliver-powerful-ai-to-the-world%E2%80%99s-largest-android-device-maker>

⁴ ⁴⁷ ⁵⁴ ⁶⁰ ⁶⁴ Amazon wins order blocking access for Perplexity's AI shopping 'agent'

https://www.reuters.com/legal/litigation/amazon-wins-order-blocking-access-perplexitys-ai-shopping-agent-2026-03-10/?utm_source=chatgpt.com

⁵ ³⁷ ⁴⁴ Cometのセキュリティを開発当初からどのように構築してきたか

<https://www.perplexity.ai/ja/hub/blog/how-we-built-security-into-comet-from-day-one>

⁶ ²¹ ³⁶ Router-R1: Teaching LLMs Multi-Round Routing and ...

https://neurips.cc/virtual/2025/poster/119214?utm_source=chatgpt.com

⁸ PerplexityがOpenClawのようにPC操作を自動化するMac上で動作するAIエージェント「Personal Computer」を発表、企業向けに特化した「Perplexity Computer」のバージョンも提供 - GIGAZINE

<https://gigazine.net/news/20260312-perplexity-personal-computer/>

⁹ ¹⁶ ²⁴ Perplexity Computer のご紹介

<https://www.perplexity.ai/ja/hub/blog/introducing-perplexity-computer>

- 11 19 40 **Computer for Enterprise**
<https://www.perplexity.ai/ja/hub/blog/computer-for-enterprise>
- 12 55 62 **Announcing Premium Sources**
<https://www.perplexity.ai/ja/hub/blog/announcing-premium-sources>
- 15 17 61 **Agent API: A Managed Runtime for Agentic Workflows**
<https://www.perplexity.ai/ja/hub/blog/agent-api-a-managed-runtime-for-agentic-workflows>
- 18 **Sandbox API: Isolated Code Execution for AI Agents**
<https://www.perplexity.ai/ja/hub/blog/sandbox-api-isolated-code-execution-for-ai-agents>
- 20 **Model Council のご紹介**
<https://www.perplexity.ai/ja/hub/blog/introducing-model-council>
- 22 **Task-Adaptive Multi-Agent Orchestration in the Era of LLM ...**
https://arxiv.org/pdf/2602.16873?utm_source=chatgpt.com
- 23 **ORCH: many analyses, one merge—a deterministic multi- ...**
https://www.frontiersin.org/journals/artificial-intelligence/articles/10.3389/frai.2026.1748735/full?utm_source=chatgpt.com
- 25 26 **Perplexity Max を紹介します**
<https://www.perplexity.ai/ja/hub/blog/introducing-perplexity-max>
- 27 **ペープレックスパブリッシャーズプログラムのご紹介**
<https://www.perplexity.ai/ja/hub/blog/introducing-the-perplexity-publishers-program>
- 29 **Agent API - Perplexity**
<https://docs.perplexity.ai/docs/agent-api/quickstart>
- 31 57 **Vertex AI Agent Builder overview**
https://docs.cloud.google.com/agent-builder/overview?utm_source=chatgpt.com
- 32 **Automate tasks in your application using AI agents**
https://docs.aws.amazon.com/bedrock/latest/userguide/agents.html?utm_source=chatgpt.com
- 33 **Migrate to the Responses API**
https://developers.openai.com/api/docs/guides/migrate-to-responses/?utm_source=chatgpt.com
- 43 56 **エンタープライズAIモデル切り替えの台頭、その内幕**
<https://www.perplexity.ai/ja/hub/blog/inside-the-rise-of-enterprise-ai-model-switching>
- 46 **Privacy & Security - Perplexity**
<https://docs.perplexity.ai/docs/resources/privacy-security>
- 48 **Is Perplexity's 'no volition' copyright strategy a clever legal shield or a long shot? Perhaps both**
https://www.reuters.com/legal/legalindustry/is-perplexitys-no-volition-copyright-strategy-clever-legal-shield-or-long-shot-pracin-2026-03-11/?utm_source=chatgpt.com
- 49 59 **Perplexity is using stealth, undeclared crawlers to evade ...**
https://blog.cloudflare.com/perplexity-is-using-stealth-undeclared-crawlers-to-evade-website-no-crawl-directives/?utm_source=chatgpt.com
- 50 **Efficient Training-Free Online Routing for High-Volume ...**
https://neurips.cc/virtual/2025/poster/117032?utm_source=chatgpt.com